

# 序

梅原 猛

当国際日本文化研究センターでは、共同研究の枠組みとして5つの研究域に分かれており、その第5研究域が「文化情報」であり、外国及び日本における日本研究の研究をすることになっている。しかしながらこの日本研究の研究というのは、海外においてもあるいは日本においてもあまり熱心になされていないのである。日本研究といえば、直接日本に関する文学とか歴史とか思想とか政治経済などを研究することであり、その研究について研究するのはいたずらに過去を懐かしく回想することにすぎないのではないかという気持ちが海外の研究者にも日本の研究者にもある。したがって、このような日本研究に対する研究は、日本の学界においてあまり顧みられない仕事であったといわねばならない。わずかに新堀通也氏を中心として行われた広島大学の研究報告などは数少ないその貴重な成果であろう。

最近まで、日本における日本研究者は海外の日本研究者に対して多くの注意を払わなかった。日本研究はやはり日本人のものであるという意識が日本の学者には強く存在していたのである。たとえば、俳句など外国人に分かるものかとか、古文書など外国人に読めやしないというような考え方が最近まであり、まだいくらか残っている。しかし最近の外国人によって書かれた研究書を見ると、俳句でも日本人よりはるかに深く理解する研究者もあるし、また古文書など日本人より実によく読んでいる研究者もある。

それに、日本研究が日本人にはとても思いつかないような視野からなされることが多い。例の江戸時代を肯定的にとらえる見方も、アメリカの歴史家によって提出されたものであった。また若冲や蕭白などいわゆる異端の画家を高く評価するのも海外の学者によって出された視野である。このように海外の日本研究者のレベルが高くなると、その国の日本研究の歴史にも関心をもたざるを得ない。

海外における日本研究にはそれぞれの歴史がある。おそらく日本研究は最初は少数のマニアのものであったにちがいない。そして日本研究者は必ずしも中国やインドの研究者のように高い位置を与えられなかったように思われる。にもかかわらず、日本研究者はそのような苦難にも耐えて、その国の研究を発達させてきた。そしてそのような伝統の中に現代の学者の仕事もあるのであろう。

当センターにおいても、この第5研究域の共同研究が少なく、私が代表者になり、園田氏を実質的なリーダーとして5年間研究を進めてきた。その成果がこのような書物になったことはまことに嬉しいことである。それは、この日本研究に多くの努力を注いで逝った多くの学者の追慕のしるしでもあり、またこれからの日本研究を進める上においても多くの示唆を与えることになろう。

国際日本文化研究センターの仕事としてこのような仕事が生まれたことは所長としても大

変嬉しいことである。園田氏をはじめ、関係の多くの人たちに深く感謝を捧げる次第である。